

水蜜桃

森岡 正作

少年は野に放つべし猫じやらし
銘柄に旅の名残の新ばしり
眩きに応ふる秋の鉄風鈴
火あぶりの錆鮎に咎なかりけり
八つ頭碎きて嫁の来手もなし
平穩の刻を啜れり水蜜桃
教会の尖塔釣瓶落しかな

竹伐つて

地方の過疎化が始まったのは今に言うことでもないが、里山の荒れも同時進行である。車窓から見て山裾にだらしなく繁茂しているのが大体真竹である。東北の日本海側で育った私は竹林を見たことがなかったが、京都などの禪宗のお寺で孟宗竹を見ると背筋を伸ばされる思いをしたものである。今の我が家には少しばかりの孟宗竹があり、山林の一角には真竹がある。真竹も一本一本見て美しく、物干し竿や川舟を漕ぐにも使われて便利であり、しかも竹の子が大変美味しい。昨年は沢山採れて近所にも配って喜ばれたのであるが、俳句の旅で二泊三日して帰ったら、もう手が付けられず放つてしまったのである。その所為ではないが今年は今全く採れず、去年の竹がびっしりと伸び放題で荒れの兆候ともなっている。登四郎先生の御句に「竹伐つてすこしは冬の日を入るる」があり、御句に従って竹を伐らなければと思っている次第である。